

「あの男が不幸なのは確かな事實でせう。で、貴女は同情してお居でなんですか。」
「勿論ですわ。」

「しかし貴女は不幸といふ言葉に對して誤つた考へを持つていらつしやる様ですわね。精神的に不
満な、あらゆる物事にぶつ、かつてびく／＼と思案をしてゐる人間を、貴女は單に憐れむべきだ
とか、不幸だとか思はないで、偉れた、智識程度の高い、強い人のやうに考へてお居でのやうで
す。そしてその人間の不決斷な點を何か意味深いものと思つて、尊敬とか愛とかをうける美點で
あり、権利であるもの、如くお考へになつてはゐらないでせうか。」

「まあ、さうでせうか？」

彼女は無邪氣に訊ねた。まだ一度も彼女はサニンミ立入つて語つたことはなかつた。が、彼れ
が特別な人だといふ噂は聞いてゐたので、彼れの面前にゐることに、何か新らしい、興味のある
穩かならぬものにも接近した氣持を覺えるのだつた。

サニンは活潑に笑つて、

「人間が獸ミ同じやうに、自己について更に考へることをしなかつた時代が我々の祖先の時代に

曾つてありました。この第一關門の後に來たのが自己省察の時代で、即ちユリイはその階梯にゐ
る人物であつて、人間進化が永遠の中に消え去る時代の代表者であるところのモヒガン族ですよ
あの男には自己自身の生活といふ本當のものがありません。あの男はあらゆる物事に對して、是
か？ 否か？ といふ疑惑のために、内証する心に悶えてゐるのであつて、それが殆んど滑稽な
ところまで達してゐます。譬へばあの男が政黨に這入つたミませう。するミあの男は、他の
者達と同じ價值に見られるのが自己侮辱ではあるまいかミ考へます。そこで政黨を出たミします
か、するミ今度は一般の運動に關係しないのはよくない事ではあるまいかミ苦しむのです。」
「私にはよく解りませんわ。」

シナは澁り／＼訊ねた。「では、あの方は人生を超越してゐる人ではないミ仰有いますの？」

「人間には人生を超越する事なんか出来ません。人間それ自身が人生の一分子に過ぎないので
人生が不満である事はある得ても、その原因は人生になくて己れにあるのです。只その人が人生
から自分を満足させるものを攝取し得ないか、或は敢て攝取しない場合、その人は人生の不平家
になるのです。人間ミは肉體ミ精神の結合體であつて、その破壊されない期間が生であり、破壊

された時即死で、我々は變體的な思想からこれを自分で破壊したりする場合がありません。肉體は獸性を要求してゐるにも不拘、その要求を耻し、穢らしいものにして意でもない存在を作つてしまふ。我々の中の生來弱く生れついてゐる者は、この事に氣がつかないで、鎖につながらたまゝで生活してゆくが、誤つた人生觀や思想に禍ひされて弱くなつた者は憐れむべき人です。彼等は生涯人間本然の要求である肉體の快樂を禁制しやうとして苦しみ跪かねばならぬでせう。さうした人は終生不安心な、あやふやな間を彷徨して、新しいミ名のつく思想なら、すぐ鷄呑みにして、その結果がどうかミいへば生を恐れ、人生を灰色な思はしい事實だミ斷片してしまひ、さては厭世病にこり罹つてしまふのです。」

「左様だわ、左様ですわ。」

シナは我を忘れた高い聲で同意した。

「僕は常にある黄金時代を夢想してゐます。」

サニンは暫らく間を置いて續けた。

「それは人間が自由に、誰憚るミころなく快樂を味ひ得る時代です。」

「ミ申しますミ、元始時代へ逆行する事ですの？」

「いや、元始時代は人間が野蠻そのものでした。現代は肉體が精神に隷屬してゐる形です。しかし人類は無意義に生活しては來ませんでした。新しい時代は創造されました。即ちその時代ミは獸慾も禁慾も存在する餘地を許さない……………」

「では、あの……………戀ミ義務ミの關係は？……………」

シナは突然訊ねた。

「戀愛に義務觀念のあるのは嫉妬のためで、嫉妬は奴隸的精神から來てゐます。この精神は害毒を生ぜずにはゐません。人間は恐れず憚らず無限に戀を享樂すべき筈であつて、そうなつたら戀も偶然や突然の歡樂が生じる結果、その形式も範圍が廣まつてゆくでせうから……………」

「サニンは舵の座に偉大に且つ頑丈に坐つてゐた。シナは一種惱ましい程の興味を感じながら、ちつミ彼れを見つめてゐた。」

「い、男、だわ。」

狡い、悪戯氣分がちらりミ彼女の心にかんだ。が彼女はさう思つたこミが恥かしくなつて、

一人でにつこりした。

狭い水路にかゝつた時、シナの操つてゐた櫂は木の枝にかゝつて這り落ちた。

「私には漕げないわ。此處は難くて……」

力抜けのした聲で彼女は言つた。

サニンは立つて彼女の方へ行つた。

「僕が代りませう。」

シナは交代し代つて舵の方へ退かうとした。小舟はひさく傾いて彼女は倒れんばかりになつた。彼女は覺えずサニンの胸に取り縮つた。そして恰かも彼れとの接觸を少しでも長く保みたい衝動から彼れの胸から離れやうとはしなかつた。

サニンはその刹那に異性が接近して來た恍惚たる魅惑を全身に感じた。同時に彼女もまたその全存在で彼れの感じてゐるものを感じ、男の要求のすべてを悟つた。そして自分のしてゐる事の何であるかを氣付かぬうちに、彼女は〇〇（以下五行抹塗）

〇〇一切のものは彼等の身邊から姿を没した。シナは不可解な深淵の中に陥つた。彼女は力なく手を垂れ、何ものをも意識しない、殆んど無意志の状態で長々舟底に横はつた。そして、奔放な喜び、肉體の炎のやうな苦痛をもつて、男性の意志と力とに身を征服される時の、〇〇〇〇の快樂に浸つたのであつた。

二十四

棒か石のやうな堅いもので、強か打ちのめされたでもしたやうに、シナは家へ歸るにすぐ寢入つたが、朝早く、まるで全身冷めたい死體のやうになつて眼醒めた。が、絶望は彼女の體に一つ

に眠りはしないらしかつた。

眼醒めと共にすぐ昨夜の出来事が彼女を捉へてしまつた。まるで酒に酔はされた時のやうなあの時の氣持を彼女は思ひ出して行つた。

あの辛辣な喜びと疼痛を肉體に感じたまま、暫らくもいふもの彼女は自分を失つてゐたのだ再び我に還つた時、自分は小舟の中に横臥し、眞近に迫つたサニンの鋭くも大きい眼眸を彼女は認められたのであつた。

彼女は歎息した。取還のつかぬものを失つた悔恨と恐怖が涙になつて溢れ出すにはなかつた。さはいへ、サニンは此上もなく優しくかつた。彼れは幾度もなく彼女に、締めつけられるやうな強い抱擁と、熱烈な接吻を雨のやうに浴せかけた。その度に彼女は震ひ戦き、得もいはれぬ官能の愉悅を全存在にひし／＼と覺えせしめられるのだつた。そして彼女は自分の意義さといふものを失つてしまつてゐたのである。

ユリイの事が閃光のやうに頭を劈いた。彼れに對する純潔な熱烈な戀は最早破壊されてしまつ

たのだ。——彼女は激しい悲哀に打ちのめされた。自殺！この考へが亂れきつた頭の中に黒い疑ひの塊になつて渦巻き轉がつた。

さまた、ユリイの許にかけつけ、泣いて一切を告白し、それから永久に何處かの遠い、土地に立ち去つてしまはう……彼女はかう考へた。さすぐその次に浮んだものは、ユリイに會ふことの怖ろしさであつた。で、此ま、何處にも行かないで死んでしまひたいと彼女は希つた。かと思ふに、何さか他に、もつと恰憫な、この過失を恢復する方法があり相なものだが……こんな考へが、心の中を斜に横ぎつたりした。

『おや、もう起きてゐるのね。』

ズボブは眼を醒すと驚ろいて叫んだ。『これは珍らしい。』

シナは細かい神経を友の舉動に注いだ。が、この老嬢は昨夜起つた奇怪な事件に對しては何一つ怪しんでゐるらしい様子も見られなかつた。

シナは纏て手に日傘を携へ、いつものやうに學校に出掛けて行つた。彼女はそこに正午までゐて、それから家に歸つて來い。

途中で、リダ、サニンに彼女は會つた。

若い美しい二人の女は、日の下にすなり立つて微笑み合ひ、何でもない有ふれた話を話し出した。が、リダは心の中で、彼女が幸福相で、如何にも晴々としてゐるのに一種病的な憎しみを覚え、彼女はまたリダの美しさ、あんな事があつたといふのに、快活で自由に居られるリダの幸福を頗りに羨んだ。

「——だつて妾はこの人よりいゝのだ。それなのにさうしてこの人許りが幸福相な顔をしてゐるのだらう？」——二人は互ひの胸の中でかう咬いて居た。

午食の後、シナは書物をかへて窓際に坐り、再び茫然として夏も終りを、見せてきた庭の光りに眺め入つた。

『さうだつて……構ひはしないこゝよ。さうせ私は死んでしまふんだわ。』

彼女は自痴のやうになつて、幾度もかう繰返した。

さ、彼女は出袂に書物をおしあて、ぢつと瞳を一點に凝らして動かさなくなつた。庭の灌木の彼方から、サニンが悠然とやつて來たのである。

『庭へ降りて來て下さいな。少し許り話したい事がある。』

サニンは窓際に歩み寄るさかういつた。『僕は彼方で待つてゐますよ。』

シナはバネのやうに弾ね上つた。得體の知れぬ力が彼女を、彼女自身何をすればいゝのか、何處へ行けばいゝのか解らないまゝに牽引してしまふのであつた。

彼女は両手を胸に組み合せ、しばらくは石のやうに立ちつくしてゐるが、急にあはてた素振で庭の方へ小走りに駆け出した。

サニンは彼女を林檎の木の生ひ繁つた暗がりにつれて行つた。そしてある切株に腰を下し彼女を自分の膝の上に抱えあげた。

で二人の格巧を横目で見るさ、彼女の首垂れた優しい横顔が、自分の廣いガツシリした胸に密着してゐて、如何にも弱々しく不思議な調和を見せてゐた。サニンはこの時彼女の美しさに一種の敬虔な情緒を覚え、彼女に禮拜したいやうな意外な氣持に捉らはれた。

——この人は私をさうしようと思つてゐるのだらう。何をやる心算なのだらう？——
彼女は恐ろしさと愧かしさのために逆上しながら考へた。そしてさうしても彼れの膝を脱け出

るこの出来ぬのをまじしがった。

『ジノチカ』

サニンは言ひ悪さうに口を開いた。「僕は貴女に對して深い罪を犯したのかも知れない。こんな處へ来る可きではなかつたかも知れないが、來ずに居る譯には行かなかつたのだ……さうか僕を知つて貰ひたい、そして僕を憎まないで欲しいのです。あの時僕は全くさうする事も出来なかつたのだから……」

シナは答へなかつた。ミサニンは震ひを帯びた優しい聲で、二人が互ひに與へ合つた無上の幸福を終生忘れないで感謝するなぞミ語り出した。

言葉の様子から彼女は、サニンが自分に傳へようミすることを、うまく傳へ得ないで苦しんでゐるらしいのを読んだ。ミ、

「貴女は今苦しんでゐられる。併し昨夜はあんなに幸福であれたではありませんか。」

この時、シナの眼前には、悪評や嘲罵の中に突き落された、汚ならしいほろくの布の形なつて自分の未來がうかみ上つた。あらゆる人々は冷めたい笑ひの顔をもつて彼女を嘲けり恥かし

めた。

恐怖の念は黒い憎惡ミなつて湧き上つた。

「行つて下さい。私なぞに構はないでゐて頂戴。」

彼女は布のやうに眞蒼になり、齒をくひしばつて彼れの膝から立上つた。

自分の無力の悲しさがサニンの心に沁みた。彼れは如何なる言葉をもつてしても、シナを慰め得ぬのを知つた。彼女の怒りミ憎しみは正しい。その弱々しい肩に負擔された重荷は、一瞬の間に全世界を改革しない限り取りのぞく事は出来ないであらう？……それは彼れの力では及ばなかつた。

サニンは、いつそ自分の名によつて彼女の生活上の保證を持たうミ考へた。がすぐ、この事の淺薄さを感じて取り消してしまつた。

「なあに、自然が解決を與へてくれるさ。」

サニンはかう思ひ返した。で、

「僕はよく知つてゐます。貴方がユリイを愛してゐらつしやつて事を……そして何よりも多く

そのために貴女が苦しんでゐられる事も……

『私は誰も愛してなぞ居ないわ。』

ミはいへ、愛人の名を呼ばれた事によつて、彼女は絶望に近い罪の自覺に苦しめられた。私はあの人を愛してゐる。胸が張り裂けるほど愛してゐる。だもいふのに私の躰はもう……

サニンに對しては驚ろかしい力ミ辛辣な快感の思ひ出しがありはしない。しかしユリイ「スワロウジツチに對しては……」

『どうか悪く思はないでくれ給へ。』貴女は前のやうに美しい。僕に與へたところの、いや、もつと強い大きい幸福を君の愛人に與へることが出来るのだ。僕は昨晚の貴女をいつ迄も忘れないでせう。今後、若しか僕のやうな者でも必要があつたら、呼んで下さい。僕は貴女のためにだつたら生命でも捧げませへ。』

シナは眼を丸く見ひらいて彼れを見た。何ミはなし、彼女にはサニンがいミはしく思はれて來た。

——何でもなかつたんだわ。皆な無事にすんでしまひ相だわ——

ふさかうした考へがうかみ上つた。ミ一切の事が非常に安易であつたやうに思はれた。二人の眼ミ眼が行き合つて結ばれた。ミ、彼等の心の底から神秘的な温いものが流叉して、二人は恰かも親はしい兄ミ妹であるかのやうな、乃至は自分達以外の者は誰も知らぬ秘密を知り合つてゐる者のやうな、温く輝かしい記憶を互ひの心の奥に刻みつけたかのやうであつた。

『では左様なら。』

シナは處女らしい調子でかすかに言つた。

喜ばしい情緒がサニンの顔を晴やかにした。彼女は彼れに握手を求めた。そして二人は兄ミ妹のやうに、單純に心を籠めた接吻を與へ合つた。

立ち去つて行くサニンの後姿を、彼女は長いこゝ悲しい氣持で見送つてゐた。聽て彼女は草の上で寝ころでその高い香りを嗅ぎながら考へた。再び、以前のやうに快活が展げてゆけ相な氣持が彼女はした。ミ、ユリイへの思出は忽ちその心を暗黒化した。が、彼女は頭を振つてかすかに呟いた。

『……考へまい、そんな事は考へぬ方がい、……考へないでも自然のうちに……』

「秋だ……もう秋だ……やがて冬がくる、雪がく、そしてまた春、夏、それから再び秋が来て、冬、春、夏……何こいふ單純で退屈な事だらう。その間俺は何をするのだ。今こ同じやうに生きるのか？……」

ユリイは悲しげに頬を歪めた。

「何も考へない事だ。そして今に年をこる。死がくる。」
常に彼れを襲ふ思想が又しても紛擾する。

「人生は既に自分から去つて行つた。世の中に特別な生活なんてものは無つたのだ。英雄ですらその生涯は倦怠さ、苦しい準備時代さ、それに酬ひられぬ喜びなき終局があつたばかりだ。」

ユリイの考へは更に進んで、幾多の偉人さその業績に思ひ及んだ。けれどその一人々々の背後にあるものは死の髑髏のみであつた。彼れは自分がそんなに平凡で、無力な人間であるかを自覺した。その自覺は、常に偉大な業績さ深遠な思想の間を彷徨してゐた彼れの空想が、如何に子

供らしい弄れの夢にしか植しなかつたかを彼れに思はしめた。

「あ、俺はさうしたらいいんだ。誰でもいいから此の俺を撲り殺して呉れる者はないか！」

「だが……さうしてそれが俺自身ではいけないのだ。他人でなければならぬ必要があらうか。人生は苦痛以外の何ものでもないさ知り乍ら、それでゐてひさ思ひに自分を始末し得ぬほさ俺は弱虫だらうか。さうせ一度は死ぬるのだ。たゞ遅いか早いかの問題にすぎぬではないか。」

彼れは庭を彷徨ひながら、頻りに死の想念に捉はれてそれから脱するこゝが出来なかつた。彼れのかくしにはピストルがしまはれてゐた。

「一つやつて見るか？ 直面目でなく冗談にだ……屹度愉快な事に違ひない。」

が、彼れは自分が自殺した後の、あの街木路での人々の噂を想像するさ、逆も恥かして實行する氣持にはなれぬやうに思はれた。

庭の木々は既に褐色に枯れつくしてゐた。

「俺の生活は終るのだ。俺の生活は終るのだ。」
さ彼れは機械的に繰返し續けた。

「だが、俺はまだ二十六だ。俺には前途がある。」

「何を考へてゐるのだ。二十六といふ事、前途にこれ丈の關係を持つてゐるか。では一體何に關係があるのだ。」

彼れは偶然シナを想つた。昨夜、丘の修道院での一場面が此上もない無様なものになつて彼を恥かした。

彼れは再び彼女と會ふ時の羞恥を想像して、それより寧ろ死んだ方がまだと思つた。

「再びあの女と會見して、此上もない恥かしい思ひを嘗めさせられるよりは、死んだ方がこれだけ立ち優つてゐるか知れない。」

「死ぬるんだ。何も彼も終つてしまつたのだ。」

この時、家の御者が彼れに中食の仕度が出来た、遠くから呼んだ。ユリイは母家の方へ立ち戻らうとしたが、

「食事をしてさうするのだ。飯を食へば何も彼も以前のやうになつてしまふ。死ぬる人間に食事などの必要があらうか。」

彼れは再び家人が呼びに来ぬうちに決行しやうと心をせいた。彼れは死の接迫した恐怖に全身を震はせながら、こそく、木の影にかくれた。そして今一度周圍に氣を配る。ピストルを胸に擬した。

同時に、自分自身すら思ひがけない瞬間に引金をひいてしまつた。

「しまつた。」

生を欲する強い願ひと死の恐怖とが喜ばしく彼れの頭に閃めいた。彼れは銃聲を耳にしなかつたが、小間使の肩を裂くやうな叫び聲を聞いた。續いて、自分の周圍に集つた多くの家人を彼れは感じた。誰か冷めたい水を頭に注いだ。黄葉が一枚、ひらく。舞ひ落ちて彼れの濡れた額に膠着した。

「ユリイ！ ユリイ！ さうしてこんな……」

——あれはリヤリヤの泣聲だな？——ユリイは考へた。同時に彼れは眼を開き、死者狂ひの動物のやうな絶望の聲をしほつて叫んだ。

「醫者を……早く……」

が、彼れは名状し難い恐怖に、もう駄目だ、何も彼も最後なのを知つた。彼れは何でもいゝから見やうとして首をのばした。が、彼れには最早一切のものが分らなくなつてしまつたのである。

(214)

二十六

知つてゐる者も知らぬ者も、彼れを尊敬してゐた者も、侮蔑してゐた者も、乃至は彼れについて少しも考へたことのない者も——統ての人が彼れの死を悼み悲しんだ。

何の理由から、彼れがあんな事をしたかについて、誰一人理解し得なかつた。が、彼等は皆一様に、自分のみは彼れの自殺の原因を解してゐるやうな氣持でゐた。そして彼れの思想に共鳴し自殺を美しい事のやうに思ひ誤つた。

ユリイの父スワロジツチは卒中を起した、めに、リヤリヤは父の病床から離れるこゝが出来なかつた。そのために、彼れの葬式には肉親の者は列しなかつた。リヤリヤの許婚のリヤサンツエツが家族に代つて式を司つた。

香りの高い秋の草花に蔽はれた故人の棺が、シナの家の前に通りかゝつた時、彼女はゾボアミ共に駆け出して會葬者の列に加はつた。

彼れの死に、サニンミ自分ミの間起つた一昨晚の出来事に、何等の關係もないミは充分に知り乍ら、彼女にはそこに秘密な連環があるやうな氣持がしてならなかつた。そしてその氣持はいよ／＼ユリイの死に哀悼の情の募つてゆく反對に、サニンへの憎惡ミなつて行つた。彼女は一晚泣き明して罪深い自分ミその不幸に悲嘆したのであつた。そして昨日サニンミの間に感じた、兄妹らしい感情は、恥づべき現象として抛りすて、しまつたのである。

サニンは會葬の列に加はつた彼女に手をさしのべた。ミ、彼女の冷めたい指の觸感に、彼女が今何を考へ、自分に對してどんな感情を抱いてゐるかを彼れは知らしめた。二人は永久に離れてしまつた。ミ彼れはかう思ひ、彼女の傍を去つてイワノアの所へ行つた。

『全く意外だね。』

イワノアは言ひ出した。『あんな意氣地なしが自殺したなんて？』
『彼奴は——』

(215)

サニンは答へた。「引金をひく三秒間前まで、さうも決心がついてみた譯ぢやないのだ。つまり生きながら死んでも同じさ。」

「屹度左様だつたに違ひない。が、兎に角自分の出口だけは自分で探し出した譯さ。」
墓地についた。

黒い土が棺を受け取つて、生者・死者の間に永遠の隔たりを作らうとしたその瞬間、シナの物狂ほしい動哭が統ての人を驚ろかせた。彼女は最早自分の秘密が人々に洩れるのを隠さうとはしなかつた。人々はすぐに二人の關係を察した。しかし場所柄彼等は同情の念に打たれ、敬意をあらはすもの、如く深く首垂れて静まり返つてしまつた。

人々は泣き悶える彼女を伴ひ去つた。そして棺の上には黒い土がかぶせられた。

「諸君、故人への弔辭があつて然るべきと思ひますが、ねえ諸君、さうも此ま、解散したのでは……」

ミシャフロフが言つた。

「サニン、君に頼むさい、だらう。」

ミ、イワノブは眞顔で主張した。

それも……左様でしたね、では……サニン君……サニン君」

ミ、彼れは近眼であたりを見まはしてサニンを探しあてようとした。

「君が自分で遣り給へ。」

ミ、サニンは答へた。

「出来る事でしたら……ところがユリイさんは實際あんなに賢明な人だつたので、私如き者の何では……さうか一言二言ばかり……」

「何を喋る必要があらう。世の中の馬鹿が一人減つただけの事だ。」

彼れの聲は高く鋭くすべての人に明瞭にわかつた。彼等は俄かに騒ぎ出した。

「何さいふ凌辱だ！」

學生の連中は、何か穩かならぬひそめきを立て、ゐたが、彼れミイワノブの歸路を塞いでしまつた。

が、二人が近寄るミ彼等は黙つて抵抗し得なかつた。サニンは悠々とその間を通り抜けた。イ

ワノブはその後に續いた。町へ出た。

「何だつて君は、あんなに人を嚇がすんだい。」

長い沈黙の後イワノブはかう訊ねた。

「あんな生若い自由主義者が、あんなに執拗く君につき纏つて君の生涯を悩ましたミしたら、君はあれ位な嚇し方ぢや承知しないだらう。奴等は、兎に角畜生さね。」

「まゝ、Sano。」

イワノブは眞面目にも冗談もつかぬ調子で答へた。そして

「そこで、これから一つビールを買ひ込んで、ユリオの靈を慰めるために、奴の墓前で飲まうぢやないか。何あに、そのうちに葬式の連中は歸つてしまふだらうよ。」

「それもよからう。」

サニンはさちらでも構はぬらしく答へた。

二十七

「おいでね。」

ユリオの墓前でビールを啣り、二時ばかりの後暗い夕闇の町にさしかゝつた時、サニンは出抜に言つた。

「何だい。」

「停車場まで見送り給へ。僕は此處を出て行くのだから。」

イワノブは立ち止つた。

「それは又、さうしてだい。」

「この町が厭になつたからさ。」

「怖くなつたのかい。」

「馬鹿らしい。何處かへ行きたくなつたのだよ。たゞそれだけの事さ。」

「かうしてさ。」

「おい、下らない質問は止めて貰ひたいね。行きたくなつたから行く。それでい、ぢやないか。僕がまだこの土地の人を知らなかつた時は、彼等が屹度何かを與へて呉れるだらうこの期待を持つてゐたものだ。シナは興味ある女のやうに見え、セメノワ……は死んでしまつたし、リダは平凡な路を歩まないだらうと思はれてゐた。ところが今はもう飽いて來た。何も彼も興味がなくなつてしまつたのだ。それ丈で理由は澤山ぢやないか。僕はあゝした人間に辛抱したけ辛抱して來たが、もう出來ないんだ。」

イワノブは長い間サニンの顔を凝視してゐた。

「そんなら行かう。」

ミ、彼れは言つた。「だが、家の人と別れなくちや……。」

「何故？ 僕は家の奴等が一番厭でなんだ。」

「だが荷物は何？」

「荷物なんか幾らもありやしない。庭で待つてゐてくれる間に、僕が部屋には入つて窓から渡すから。若しめつかりでもするに面倒臭いからね。」

「うむ……しかし君と別れるのは僕にとつて非常に辛い事だよ。」

「そんなら僕と一緒に行かないか。」

「何處へ。」

「足の向いた方にさ。」

「僕には金がない。」

「それはお互ひ様だよ。」

「いや、君一人で行き給へ。十五日から又學期が始まる。さうなるに僕の氣も少しは落付くだらうから。」

で、二人は庭を横ぎつて、サニンは部屋の中には入り、イワノブは落葉を踏みながらその窓の外に立ち寄つた。

サニンは琵琶を立てぬやうに廣間を通り抜けようとした時、きゝなれた聲を耳にしたので、バルコンの扉のところで立ち止つた。

「では、さうしたらいいの？」

「さうしたらつて……僕はさうも貴女が僕の犠牲になつてゐられるやうに思はれて……僕は」
リダミイキノブの聲であつた。

「左様よ。左様よ。」

リダの聲はこみ上げて来る涙を抑へつけてゐるらしい調子に響いた。

「妾ぢやないわ。貴方が犠牲になつてしまつたんだわ。貴方だわ。貴方だわ。」

「なぜ貴女は僕を理解して下さらないのでせう。僕は貴女を愛してゐます。ですから少しも犠牲ではありません。併し僕等のうちの何方かが犠牲だと思へてゐるのだと思へば、僕等はさう生活したらいゝのです。」

イキノブの聲は恰かも彼女を説伏するが如き熱心で生々しさがあつた。

「僕を理解して下さい。僕たちは唯一つの條件——お互に犠牲を拂つてゐるのだなぞと思へない——の許にあつてのみ同棲する事が出来ます。二人が愛し合つてゐれば僕達の結婚は合理的で自然だが、若し愛し合つてゐないと思へば……」

リダはヒステリックに泣き出した。

「さうしたのです。僕が何かお氣に觸つたやうな事でも言ひましたか。一體何のために泣くんです。」

「知らないわ、知らないわ、妾……」

彼女の聲は物悲しく傳はつた。

サニンは顔をしがめながら自分の部屋へは入つた。

「ふん、彼女の事も片がついたらしい……」

と一人で呟いた。

「おい、まだなのか。」

庭からイキノブが催足した。

「すぐだよ。」

ミ、サニンは窓から手靴をさし出した。

「渡すよ。」

そして彼れは窓からミび下りるミ靴を受取つた。

『さあ行かう。』

二人は急ぎ足で停車場についた。

機関車が勢よく煙を吐いたり、プラットホームを、包みをかゝえた百姓が走つたり、待合室の内も外も群衆でうよ／＼してゐた。

停車場の待合室で二人は一杯飲んだ。

發車が迫つた。

二人はプラットホームへ出た。そして人氣の少ない静かな處に立つた。

『では、左様なら。』

『左様なら。』

二人は接吻し合つた。

汽笛が長い長い尾をひいて鳴つた。汽車はがたりと軋り。のろ／＼動き出した。

『お、！』

イワノブは不意に嗚鳴るやうに叫んだ。『僕は君を愛してゐた。君に於いては僕は始めて眞の人

間を見たのだ。』

『その僕を好いてくれたのも君一人だつた。』

サニンは客車の踏段にさび乗つた。

『左様なら。』

『左様なら。』

列車は次第に速度を加へてイワノブの前を捉め去つた。最後の尾の紅燈が闇の中に閃めいて、遂ひに見えなくなつてしまふまで彼れは悲し相にその後を見送つてゐた。

二十八

客車の中は、窒息しさうに息苦しく狭苦しかつた。そしてランプのほやけた黄ろい光りの下にほろ／＼の着物をつけた人々が動いてゐた。

サニンの横には三人の百姓が席を占めてゐた。彼れ等は何か話し合つてゐた。彼れは途中で席を他にうつじた。

夜が更けるにつれて、人々はいぎたない眠りに陥つて行つた。

が、彼れの前にゐた長い上衣をつけた小商人だけが、まだ起きて女房を叱りつけてゐた。女房は小さくなつて、眼だけをきよき突かせてゐた。

「待ちやがれ、この死損ひ奴が！ 今に思ひ知らせてやるから。」

小商人は踏まれた蛇のやうな聲で嚇しつけた。

サニンは一旦眠つてゐたのだが、女の病的な苦しい呻吟の聲に眠を破られた。小商人は素早く手を引つこめた。しかし彼れが女房の腕を捻りあけてゐたのを彼れは見つめた。

「君はまるで獸のやうだね。」

サニンは不機嫌に言つた。

小商人は、その小さな意地悪く光る眼で彼れを見つめておし黙つた。

サニンは毛虫のやうに彼れを見返してゐたが、軈て立つて乗降口の方へ行つた。ごたごた、まるで荷物か何かのやうな塊になつて旅客達は兩側に眠つてゐた。

窓ガラスには黎明のほの明りがさし、眠つた人々の顔を死人のやうに見せた。

乗降口に出た彼れは、肺臓がふくれ上る程朝の新鮮な空気を呼吸した。

「人間さういふ奴は、實に穢らしい存在だ。」

かう考へた彼れは、ほんの僅かな間でもいゝから、人間共から脱け出して行きたい氣持になつた。

朝の雲は東の空を紅に縁取つてゆき、夜の蒼白い、病み上りらしい影は、廣野の彼方へ消え失せて行く……

サニンは何氣なく列車の踏段に降り立つた。そして鞆の事など思ひ出さうもしないで、大地にヒラリツミ飛び下りた。

列車は汽笛を鳴らし、物恐ろしい速力で彼れの傍を疾驅し去つた。

サニンは土手の傾斜面に倒れた。が、立ち上つた時彼れは笑ひながら、

「素敵だ！」

喜ばし相に叫んだ。

廣い涯しない平原のたゞ中であつた。大地は自由に八方に擴がつて遠く地平線は朝霧の中のもの

まれてゐた。

サニンは眼を輝やかし、力強い大股で、朝焼の輝かしい彼方に向つて一筋に歩るいて行つた。
夜の眠りから醒めた平原は緑に空色青に燃え上り、サニンの真正面に太陽はばつと輝かして最初
の光箭を投げつけた。この時、恰かも彼れは太陽に向つて進軍してゐるもの、やうであつた。

—(完)—

大正十四年十二月二十五日印刷
大正十五年一月五日發行

定價六十錢
送料六錢

原田讓譯

發行者兼

東京市淺草區瓦町十番地
榎本松之助

印刷者

東京市淺草區瓦町十番地
鳴田良治

發行所

東京市淺草區瓦町十番地
榎本店



ソニアサ

大阪市南區松屋町三九番地

榎本店

振替大阪三四八二番 電話東二一六二四番
一七九五番

東京市淺草區瓦町十番地

榎本東京支店

電話淺草四七一七番
振替東京七二七九三番

發行所

原 パール 田 シフチ 譲 原 作 譯 作
サ ア ニ ン
定 四六形二三〇頁
價 六拾錢

原 ゾエミ 田 ラル 譲 原 作 譯 作
ベ ラ ミ ー
定 四六形二三〇頁
價 六拾錢

高 フオ 山 イス 豊 ルカ 花 ド 原 作 譯 作
サ ロ メ
定 四六形二〇〇頁
價 六拾錢

原 ゾエミ 田 ラル 譲 原 作 譯 作
さ か ば
定 四六形二〇〇頁
價 六拾錢

終

